

校長室だより～和光高校今昔 第7号 H26.6.21

埼玉県立和光高等学校 校長 村田 達

和光ラグビー部の栄光

和光高校の歴史に燦然（さんぜん）と輝くのがラグビー部の活躍である。結果のみならず、多くの指導者を輩出し、埼玉県ラグビー界を支えてきている。現在川越工業高校勤務の冨沢宏（9期生）は、和光ラグビーの魂を受け継ぎ昨年はチームを関東大会に導いた。西武台高校の高橋正（4期）、朝霞高校の岡野義彦（5期）、開智高校の大熊孝雄（5期）、南陵高校の桑山秀家（9期）らが指導者として、また、プレーヤーとしては、芳野喜隆（1期）が日体大・トヨタ自工で、落合滋（12期）も大東文化大・東芝府中で日本一になるなどともにスタンドオフとしてチームをけん引した。上記冨沢も日体大で主将を務めるなど関東大学対抗戦リーグで活躍した。キラ星のごとく存在感を示すOBの中で忘れてはならないのが池上正（5期）である。高校時代からロックとして全国にその名をとどろかせていたが、日体大進学後も主将として大活躍した。残念ながら母校の教員を目指している途中若くして逝去された。存命であったなら埼玉の教育界に大いにリーダーシップを発揮してくれたとつくづく無念である。

さて、ここに列挙した錚々たる卒業生に共通するのが、ラグビー部顧問吉田道行先生（後に鶴ヶ島高校・川越南高校校長などを歴任）に対する畏敬の念である。そもそも和光高校の創設期を語るのに絶対に外すことができないのが吉田先生の奮闘なのだ。まずは先生に焦点を充てて述べていきたい。



東京出身の吉田先生がラグビーに出会ったのは、板橋にある私立城北高校のグラウンドであった。高校ジャパンの監督もされた名伯楽石丸克己先生のご指導の下めきめきと頭角をあらわし、高校時代から都を代表する名選手であった。東京教育大進学後もスリークォーターバックとして活躍し、関東学生代表に選ばれカナダチームとの試合に臨んだ。ラグビーの聖地・秩父宮競技場に一枚の写真が飾られている。小さな日本

選手が身体の高い外国人選手を猛タックルで倒している写真である。この名もなき選手こそこの試合で大活躍した吉田先生なのだ。凄まじいまでの気迫でどんな相手にも怯まず立ち向かう姿勢はまさに和光ラグビーの原点である。その闘志あふれるプレーぶりは当時の大学ラグビー界を席卷した。そこから数年後、吉田先生は和光高校開校と同時に赴任され、ラグビー部顧問また初代生徒指導部長として、以来11年間にわたり獅子奮迅の御活躍をされたのである。20周年記念誌に掲載された吉田先生の御寄稿を一部紹介したい。

「このチームで勝てなければ、二度とチャンスはない」と思ったほど、FW, BKのバランスの取れたチームを53年度に育てることができた。和光のラグビー部史の中では、最強チームだった。日・祭日の練習は、ほとんど八幡山の明大グラウンドで、



目黒高校や国学院久我山高校との練習試合で費やした。年間の練習試合は150回にも達した。全国大会の予選が始まった時から、決勝戦での対熊工のことしか頭になかった。準々決勝で埼玉栄高校に100対0で圧勝、SOが軽い肉離れを起こし準決勝の行工戦に出場が危ぶまれたがさほど気にならなかった。しかし、準決勝はS

Oの差が勝敗を分ける結果となってしまった。チームもそして私も、11年間のラグビー指導でもっとも悔いの残る試合だった。ただ、この年の救いは、熊工を中心に編成された埼玉の高校選抜に和光から3名の選手が抜擢され、長野国体での準優勝に貢献したことであった。

前年度に比較して、昭和54年度のチームは体力・素質に恵まれず優勝を狙う力はなく、ベスト4に入れば上出来だ、と思っていた。このことは部員一人一人も良く自覚していた。「一人では勝てない、しかし15人がまとまれば勝つチャンスはある」これがチームに言い続けてきた言葉である。私としては、精神力とまとまりに期待をかけた。そして今思えば、このチームが私の指導にもっとも忠実だったような気がする。全国大会の予選、準決勝の相手は予想通り行工だった。残り8分まで和光は13点のセーフティリードをし誰もが勝利を信じて疑わなかった。ところがこの後奇跡が展開し始めたのである。実質的には、残り7分くらいから、行工の逆襲が始まり、あっという間に、2トライ、2ゴール、1ペナルティの合計15点(当時)を奪われ、ノーサイドの時は見事な逆転負けであった。

私の和光11年間で、優勝という経験は昭和55年度の新人戦優勝だけで、全くお

恥ずかしい次第である。気性が激しく、個性的な顔ぶれが多かっただけに、指導の仕方では、期待のできるチームに成長するはずであった。しかし私の指導力ではどうにもならなかった。56年度は朝霞高校に、57年度は行工にともに準決勝で敗れ、全国大会の予選埼玉大会では一度もベスト4を突破することができず、私の埼玉でのラグビー指導は終わってしまった。(平成4年刊行「創立20



周年記念誌」より)



ここでは、自戒を込められ敗戦の記録を残されていらっしやるが、新設校ラグビー部は素晴らしい成長を遂げてきた。昭和49年から7年連続で関東大会に出場した事実はまさに奇跡であろう。伝統もグラウンドもまったく何も無かった所からスタートした1期生から始まったのである。昨年(平成25年)

30年の時を経て、連続出場を途絶えさせた代の富沢が川越工業を関東に導いたのはまさに執念であろう。まぎれもなく吉田道行先生の魂が受け継がれているのである。ラグビーポールが無くなったグラウンドではあるが、和光高校卒業生の多くが誇りに感じていたラグビー部なのである。

